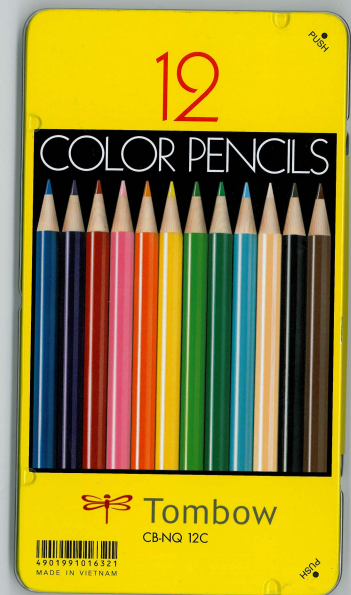


取り急ぎ筆落上信
 忘れぬ文海土水池に送
 へて詠花咲かせん九
 蓮筆金光よ英園に
 此為事勿れ佛僧は命を
 愛するもの哉花送京師
 を發しん後は念佛正法
 論念佛經を論相對しん
 治系のすい弟老老之愚
 刻に明暮れ經を論ぬ聖光教



取り急ぎ、筆落上は言
忘れぬ又、海土の池に送た
るゝ一詠を咲かせん九の
蓮筆、金光よ、夷国に
此の事、勿れ、佛僧は命を
受けるもの、候に、送京師
を發し、ん後は、念佛、正法
論、念佛經、を論相對し、
治まらざる、弟、悉く、愚心
刻に、明暮れ、經を、論、を、聖光、殿
に、鎖、而に、歸り、汝、の、一、述、を、
正法論、亦、樂、を、ん、多、數
の、同意、を得、り、る、亦、樂、住、道
鹿谷、の、龍、り、て、吾、を、訪
れ、る、事、を、息、の、金光、よ、

は鎮西に歸り汝の迷は

正法論亦樂きん多敷

の同意を得るも亦樂住道

鹿谷に籠りて吾を訪

れり幸に無事金光と

師弟相寄りし所を係つ

は謀觀きえれんと去りに

大原とい諸宗の学徳に論

せし吾が昔年お頃を思ひ

諸論の定結を得ぬ吾を

身心に銘じたまふなり

心を唯念佛を申し自

かりを慰みたり候も佛

の御出に候り候か否かは

多餘成心を覚へ候間亦樂

徑道は鹿谷とて吾が故を
得ず 朝宮の局を度し
うたかたの深き世衆に
及ばし教障を有するに
途日洛外に波紋一南都
敵門に達し念佛断絶
水北一を起すを愚見に
間に吉水の里に也
庭葉を隨風東風も吹か
ず波に佛法僧のふんず
るもなみ鳴きこへん氣
味を乃鴈の并能交う他
声をん吾とえ絶え候哀
れ哉 京樂徑道は柳丸
南都敵門の諸宗は念佛
断絶を候非邊使方に

とていふは、
此の文は、
法華の文に
あらず。

と消し、
次第は吾

うに多く、
流派及び死罪

誤を蒙むるに
なり。

依る香水は消灯の如

金花よ、
刻も考ふ急

が、
師ある處に
歸られよ

吾
系師を追れよ

香水を護るは
誤也

に致し、
得られず、
鑑而

に聖光あり、
と思ひ、
爾来

此の文、
歸宗を法然房

源空が誤あり、
と思ひ、
起證を辨するなり

誤は支那國越王
句踐の臣

范蠡の如く、
一吾れに

あるが故に、
念ふは衆生

とすなり世を護るなり

金花よ世は真暗の末

法なり嵐となり怒涛と

なりん世寵収すなりとん今元

末は足涯を界なり聖者

末張念佛獨明抄の出世

する劇なり汝は末法の世

に疾衝菩薩

迷

の愛是念佛の正法を遺

せよ我々のくわ教は

漢文宗とも勢觀房源

智の如く若くは悉く人

大なる候金花と源

空は罪刑に依りん蘇

井甚き度の俗名に

は此の世に張文の身に

着くは得られぬなり

其甚多の修名に

は此の世に法友の身に
着くは縁られぬとわ計
吾が分身なれば吾が念佛
も後世に繼ぐると信
道に流るなり今自南海
道に流るなり楠籠の

名残の想を法に遺し
筆を留むなり
後法唯師の本願に
念やうのなり

永元成辰年

丙午年九月

法然寺源雲

金花島圓證

道に流れてはなり今自南海
のほとけに成りてはなり

名残の想を心に遣へし
筆を留むなり

後世の世に成る本願に

念やうのそなり

永元成辰年

永元成辰年

法然房源空

金光房圓鑑